

**写真1 噴火直後の北麓からみた磐梯山** (砂目石版, Sekiya and Kikuchi, 1899. 東京大学地震研究所所蔵)

帝国大学教授関谷清景は、噴火4日後の7月19日に現地に入って調査をすすめ、詳細な英文報告書を作成した。この図はその報告書に掲載されたもので、その後内外の火山学の教科書に掲載されている。火口壁からは活発な噴気が立ち上っていて、山麓には山体崩壊による岩屑なだれ堆積物が分布し、多数の小丘(流れ山地形)が認められる。



**写真2 現在の裏磐梯地域からみた磐梯山** (磐梯山噴火記念館提供)

噴火後に堆積物で埋め立てられた長瀬川水系はその後水をたたえて、檜原湖(画面下部)など多くの湖沼が形成された。これらの湖沼はこの後約30年にわたって決壊を繰り返した。約100年を経過した現在の裏磐梯地域は、国立公園として多くの観光客を集めている。



**写真3 1980年噴火後のセントヘレンズ火山** (鎌田浩毅撮影)

米国西海岸のセントヘレンズ火山は、1980年に噴火をして、山体崩壊をした。この噴火はマグマ性の活動であったが、磐梯山の1888年噴火とよく似た活動であった。この噴火後、噴火活動で山体崩壊をして、岩屑なだれを発生する活動様式が注目され、研究されることとなった。写真は、北麓からの眺望で、火口内には噴火後に成長した溶岩ドームが見られる。(本文 P.14 写真1-6)



写真4 噴火後の磐梯山地域の堆積物の分布図 (大塚, 1889。国立科学博物館所蔵)

当時の農商務省地質局からは、和田維四郎と大塚専一が磐梯地域を調査した。この図は、大塚専一による報告書に掲載された図で、噴火前の地形が等高線風に描かれていて、堆積物の分布状況も示されている。なお、噴火前には地形図は作成されていなかった。梶原良成氏の画像集録作業の支援による。(本文 P.12 図1-5)



写真5 5代目菊五郎の役者絵（日本橋区吉川町2番地 松木平吉、明治21年9月10日印刷・発行。東京大学総合図書館所蔵）（本文 P.93 図3-7）1888年10月3日中村座で初演された「音聞浅間写画」の主演5代目菊五郎の役者絵。天明浅間山噴火で被害を受けた信州を舞台とした悲恋物語。噴火場面に磐梯山噴火の実景を取り入れたとして話題となった。



写真6 「岩代国 ばんだいさん 一ツせぶし」（下谷区御徒町佐野金之助、明治21年8月3日発行。東京大学地震研究所所蔵）  
「一ツ ひとつのうはさにきくよりも、あわれいふくしまいわしろよ、このばんだいさん・・・」と数え歌で、磐梯山噴火の悲劇を歌う。これは、文庫本大に二つ折りした仮綴じの読売の種本である。この時代はまだ、江戸時代の気風を残す読売が街角で数え歌などにして、事件を伝えている。



写真7 「警梯山噴火之図」 (3枚続、錦絵 浅草区森本須太郎・著作、明治21年7月25日印刷、同月25日発行。警梯噴火記念館所蔵) 近世の一大変事として、噴火で田畑が埋まり、死者多数出たことを伝える。

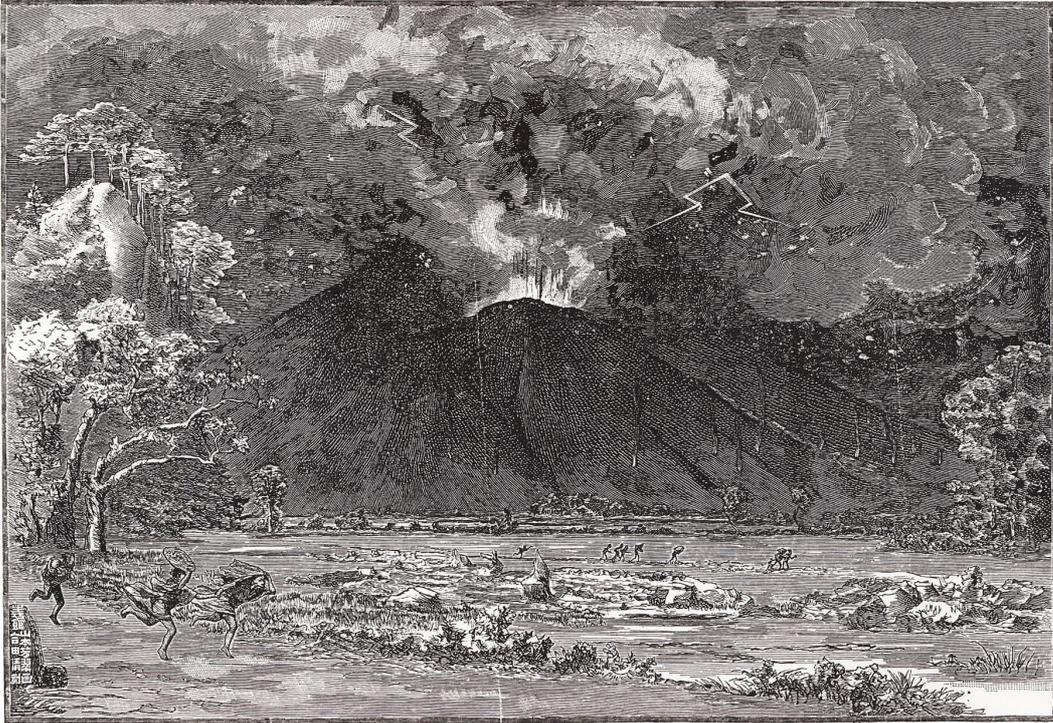


写真8 「岩代国 警梯山噴火之図」 (3枚続、錦絵、幾英筆；京橋区佐々木豊吉、明治21年7月18日印刷、7月20日発行。警梯噴火記念館所蔵) 300年前慶長16年の大地震で山崩れと洪水が発生したことを説き、若松から6里のところがあると近傍地図を添えて説明する。噴火の様子は、山鳴りの後、青黒き雲が出て、やがて雲先がかきの如くなり、灰白色になって、芥子粒のようなものが降った。その後大爆発があり一寸くらいの割り石が飛んできたと書く。説明部分は木版ではなく、活版印刷。



写真9 「警梯山噴火之図」 (3枚続、錦絵、井上探景画、日本橋福田繁次郎印刷発行。警梯噴火記念館所蔵) 噴火の惨状について、破裂によって数百人が埋まり、また、川上温泉では数丈 (15~18m) の土砂に5, 60人の温泉客が埋まった。警察官が救助にあたり、恩賜金3,000円が下賜されたと伝える。

圖 眞 火 噴 山 梯 磬



東京朝日新聞第千九十五號附録

写真10 「磬梯山噴火真図」（『東京朝日新聞』明治21年8月1日号付録。東京大学明治新聞雑誌文庫所蔵）

東京朝日新聞は、記者のほかにもパリで新技術を学んだ画家山本芳翠、版画家合田清を現地に派遣し、木口版画の噴火図を1888年8月1日号の付録として出版し、迫真性に満ちた噴火図が評判を呼んだ。

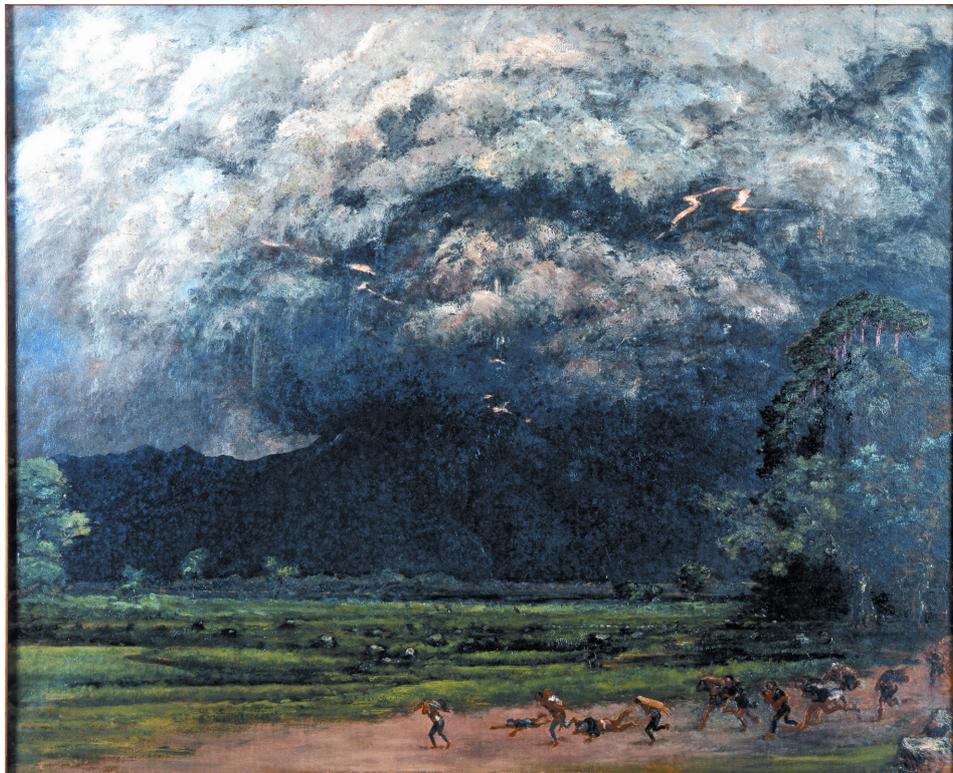


写真11 山本芳翠による磬梯山噴火を描く油絵（宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）

山本はフランスに留学し、油絵の技法を学び、帰国後油絵も製作した。山本は、合田清とともに朝日新聞から磬梯山噴火の現地に派遣され、木口木版画の原画を製作、その原画に基づいて製作した油絵を宮内庁に献上した。新聞付録とは人物が逆向きになっている点が版画の制作過程を物語るものといわれている。



図1 洪水履歴と河道変遷図(貞方, 1979に加筆) (本文 P.99 図4-2)

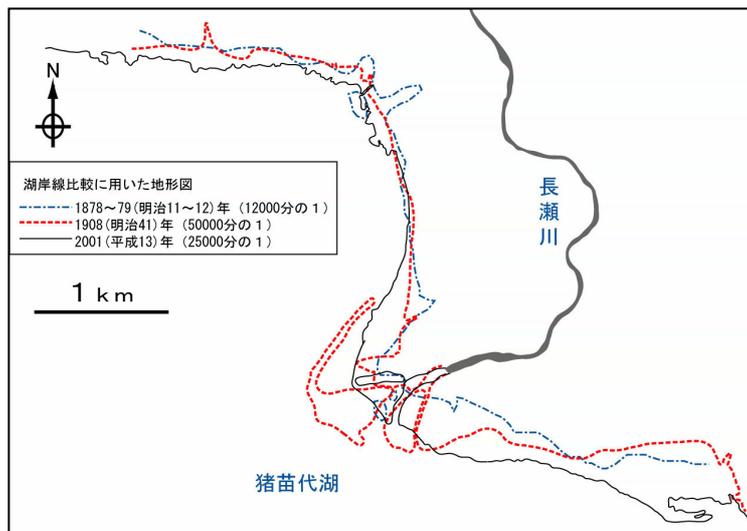


図2 長瀬川河口域の変遷(安積疏水事務所測量図及び国土地理院発行の地形図より作成) (本文 P.107 図4-5)



写真12 最近の長瀬川と磐梯山 (猪苗代町提供) (本文 P.118 写真4-10)

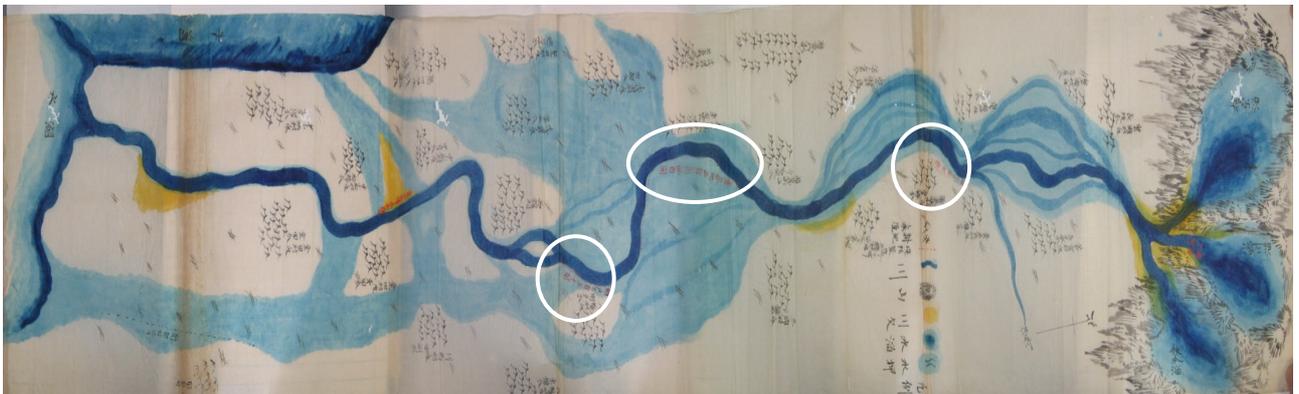


写真13 「長瀬川堤防工事御着手願」の付図(「長瀬川治水計画書類」(福島県)より。福島県歴史資料館所蔵) (〇印は至急工事要望3か所:左(上流)から順に「樋ノ口」、「東谷地」、「明戸」) (本文 P129 写真4-19)

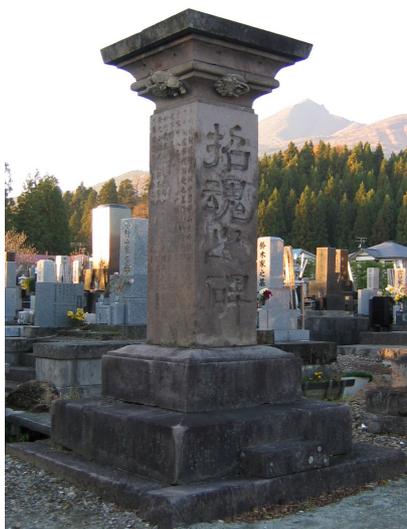


写真14 招魂之碑 (佐藤公撮影)  
(本文 P57 写真2-30)

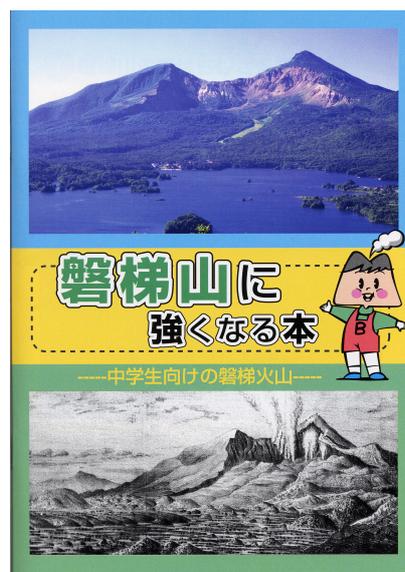


写真15 「磐梯山に強くなる本」  
(福島県火山学習会提供) (A5版28P)  
(本文 P.136 図5-6)

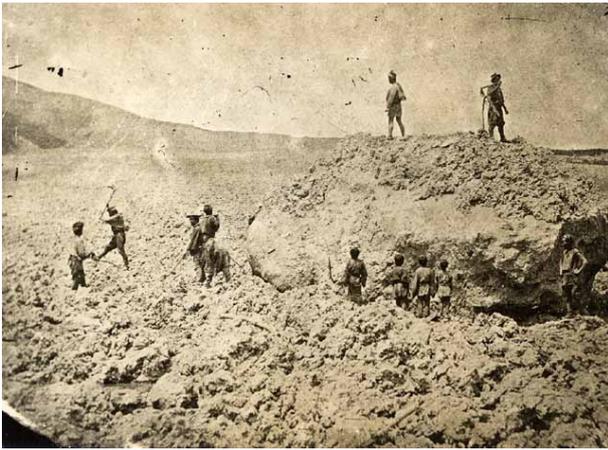


写真16 岩田善平の写真 左：見柵村大石 右：見柵村遠景（竹内写真館所蔵）（本文 P145 図付-4）



写真17 遠藤陸郎の写真 左：渋谷村暴風熱灰 右：白木城小学校（福島県立図書館所蔵）（本文 P147 図付-6）



写真18 バートンの幻灯スライド 左：噴口内岩石 右：噴口遠望（国立科学博物館所蔵）（本文 P149 図付-8）



写真19 磐梯山噴火の幻灯写真 (大迫, 2003. 国立科学博物館所蔵)

磐梯山の噴火後に撮影された写真から作成された幻灯用写真 (現在のスライド用ポジ写真) で、一部には彩色がなされている。写真の一部はウィリアム・バートンによって撮影された。関谷・菊池の報告書 (1889) に掲載された図のもとになった写真が含まれている。関谷清景の噴火後の講演会では、この幻灯写真を用いた可能性がある。



写真20 コロディオン湿板法の銀浴器 (富重写真所蔵) 『富重写真所の130年』展 (熊本県立美術館, 1993年) カタログより (本文 P.143 図付-2)



写真21 野外用四つ切暗箱カメラ (富重写真所蔵) 『富重写真所の130年』展 (熊本県立美術館, 1993年) カタログより (本文 P148 図付-7)



From photograph taken by Prof. W. E. Burton

**写真22 噴火後の火口内での堆積物 (Sekiya and Kikuchi, 1899. 東京大学地震研究所所蔵)**

これは関谷・菊池の英文報告書に掲載された図であるが、ウィリアム・バートン撮影の写真をもとにしている。この英文報告書は帝国大学理科紀要に掲載されたが、1889年版と1890年版とがある。両者に掲載された同一の図に、無彩色と彩色とものものとがある。日本地震学会英文報告書に掲載の論文 (1890) も同一内容である。 (本文 P153 図付-12)



破家村澀颯  
畚壞ヲ民谷風

5-56

**写真23 岩屑なだれの襲った渋谷村の被災写真 (宮内庁書陵部所蔵)**

本報告書の作成にかかる調査で見つけた宮内庁所蔵の未公表写真の1枚。写真には、右の方になぎたおされた立木と、屋根の押しつぶされた民家が写っている。樹木の枝と葉は落とされておられ、屋根には火山灰が積もっているようにも見える。左前には岩屑なだれによる堆積物が残っており、左から右へ爆風が通過した様子が読みとれる。 (本文 P.29 写真1-10)